

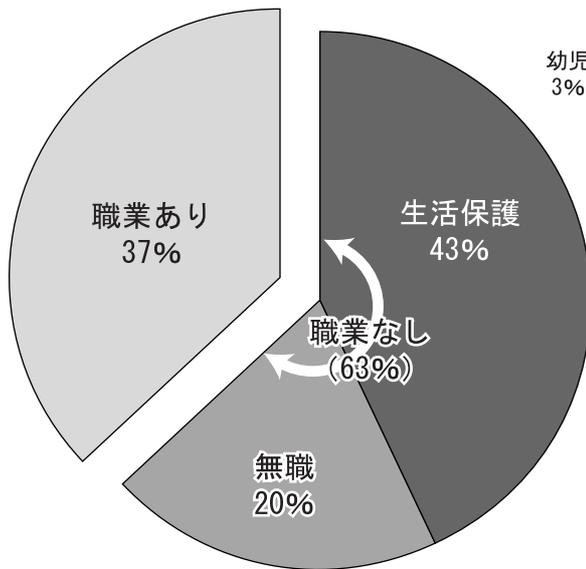
MINDAN



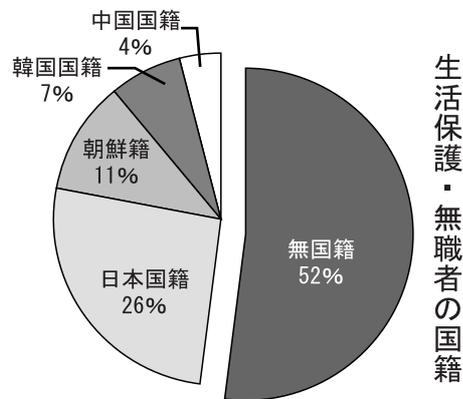
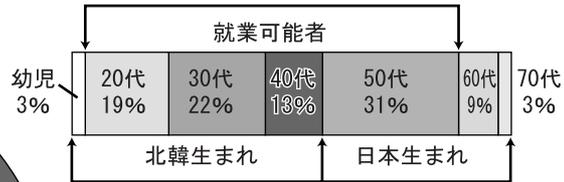
# 脱北者支援 Report

編集・発行 = 脱北者支援民団センター TEL:03-3454-5811(FAX兼) e-mail : sien@mindan.org

職業別内訳



生活保護・無職者の年齢構成



## 在日脱北者の6割以上が無職

～もとめられる行政の支援～

当支援センターが直接支援をしている脱北者全員を対象に調査を行ったところ、6割以上の方が職業に就くことができず、(左円グラフ参照)生活が非常に困難な状況が明らかになった。

### < 9割は働けるが、就業は困難 >

職業のない方を年齢別に分けたところ、60歳以上の高齢者と幼児の数名を除外すれば、実に9割近くの方が就業可能年齢となっている。(右棒グラフ参照)

さらに、50歳以上の方が日本で生まれ育った(日本人妻を含む)元在日韓国人であり、40歳代までが北韓で生まれた子供となる。

就業が困難となる理由は、不景気のため50歳以上の方の募集が乏しいことや、若くても

北韓で生まれ育った子供らは、日本語能力や電車の乗り方などをはじめとした日本の基礎的な知識不足が主となっている。

### < 無国籍というだけで断られる >

就業可能な方のなかで、無国籍が過半数を超えている。(右円グラフ参照)

在留の資格が定住者となっているので就労には全く問題がないにもかかわらず、(アルバイトを含めた)就職の面接時点で不信に思われ採用されないというケースが非常に多い。

この為、当支援センターでは、支援に賛同して頂ける方々に就職の斡旋を呼びかけている。

### < 制度的な支援を要請 >

韓国に入国した脱北者らは、定着を支援する

ための施設が完備されており、脱北者らがスムーズに定着できるように銀行の利用方法、自動車教習、法律知識などの各種教育をはじめ、文化的違和感解消プログラムに至るまで約3ヶ月に亘るプログラムが用意されている。さらに、施設を出たあとも国営の住宅が無償で貸与され、毎月支援金を受け取れる制度がある。一方、在日脱北者の場合は、成田・関西空港

に到着したあとからは制度的な支援が一切ないため、当支援センターなどの民間団体が全ての支援を行っている。

このような状況を踏まえ、当支援センターは、日本政府に対し制度的な支援の実現を粘り強く求めるとともに、在日韓国人はもとより、多くの日本の方々の幅広い層への支援を呼びかけている。

## 人には見えぬ、心の苦しみ

～在韓脱北者との違い～

当支援センターと協力関係にある都内の大学病院に勤務している在日韓国人3世の医師、李創鎬さん(39)が、「在日脱北者の精神面と生活の質が不良」として、在韓脱北者と比較した結果、在日脱北者の方が、より精神的に苦勞していることが学術的な調査により明らかになった。

調査方法は、在日脱北者31名、在韓脱北者151名を対象とし、「ベック式うつ病評価尺」に基づき、身体・心理・社会的関係・環境の各領域を数値化し総合的に行われた。

### <受け入れ制度のある韓国>

在韓脱北者の場合は、脱北者を支援するための施設「ハケ院」での定着教育プログラム、定着金と住居の提供、就職の斡旋などの支援態勢が整っており、言語はともかく文化的な問題においても北韓と非常に似ているため精神的負担が少ない。

さらに、在韓脱北者の場合は、全員が韓国国籍となっているため外国人という区別はない。

### <就業難も精神的負担>

一方、在日脱北者の場合は、制度的な支援態勢がなく、当支援センターをはじめとしたNGOなどの民間団体が支援しており、協力者は徐々に増えているものの充分とはいえない。また、国籍も無国籍となる場合が多いため法的には問題がないにせよ就業も困難となり精神的な負担となっている。

さらに、日本では拉致問題などとあいまって北韓のイメージが著しく悪いいため、脱北者という北韓から帰ってきた立場を明かすことが難しいために精神衛生上、ストレスが溜まるケースが多く見られると指摘された。



生活に関する質問を受ける脱北者

## 昨年末、交流会を開催

～生涯初のボーリングに笑み～

### < 関東で40名が参加 >

12月4日、都内のボウリング場で関東地区の交流会が行われ40名が参加した。脱北者らは、ピンが倒れるたび歓声をあげ、手を叩きあった。あたかも北韓での過酷な生活でしばし忘れていた青春を取り戻したかのような喜びにあふれていた。側で見守っていた協力者も「脱北者らは日ごろの苦労を吹き飛ばし、忘れかけていた笑顔を取り戻したようだ」と笑みを浮かべていた。

### < 初投球でストライク！ >

ある脱北者の女性(76)は、高齢であることやボウリングを一度もしたことがないため、交流会の前の晩まで参加を思い悩んでいたが、他の脱北者に勧められ参加し、「ボウリングのルールも何も分からなかったけど、ボランティアの方々が親切に教えてくれたので有難い。1回目の投球でいきなりストライクをとった時、自分も周りの人も驚いた。こんなに気持ちいいのは本当に何十年ぶり。」と興奮していた。

### < 広がる支援の輪 >

当支援センターと協力関係にある日本のNGOの関係者らは、「交流会は、民団の支部役員の協力者をはじめ、各種ボランティアの方たちと連携を強化する場となっており、回を増すごとに様々な協力者が増えている。今後も続けてほしい」とエールを送っていた。

### < 関西で28名が参加 >

一方、12月11日にも大阪市内で関西地区の交流会が行われ28名が参加した。関西でのボウリングは既に2回目と

なり、脱北者らは前回とはうってかわり、靴を履き替えることからボール選び、投球ホームに至るまでスムーズに進行しながらゲームを楽しんでいた。

### < 引きこもりの娘が笑顔を >

ボウリング終了後、懇親会の席では久しぶりに会った仲間(脱北者)同士で和気あいあいと旧交が温められた。12月に入国した女性(23)は、「自分と同じ苦しみを乗り越え、同じ立場の人たちがこんなに大勢いることを知って心強くなった」と語り、先に入国していた母親(45)は、「娘は日本へ来て間がないため、外に出るのを怖がり引きこもりがちだったが、北韓で幼少の頃に見せてくれた笑顔を取り戻してくれてほっとした。」と胸を撫で下ろしていた。

当支援センターが発足してから2年半、地道に交流会を続けてきたがいがあり、脱北者間ももとより協力者同士でも連携が築かれた。これからは幅広くさらなる理解と協力を呼びかけながら支援体制を強化していきたい。



ボウリングを楽しむ様子

## 行方不明の娘、韓国で確認

～もう離れたくない、家族のいる日本へ～

### < 再会を喜び、空港で号泣 >

1月下旬、韓国に入国していた脱北者の金美姫さん(仮名・33)が、成田空港から入国し、脱北し既に日本へ入国していた元在日韓国人の母親である金明子さん(仮名・58)や姉・妹と再会し、「もう、逢えないかと思った」と叫びながら抱き合い号泣した。

東京在住の金明子さんは、生き別れになっていた次女の美姫さんを2年以上前から探していたが、これといった手がかりがなかった。

ところが、昨年8月、当支援センターが明子さんから依頼を受け、韓国政府に照会したところ、美姫さんが脱北者の定着支援施設「ハナ院」にいるとの回答があった。また、さらに施設で知

り合った同じ境遇の男性と結婚することを決めており、韓国で生活する意思を固めていた。

### < 支援のない、未知の国日本へ >

美姫さんは家族と国際電話で話しているうちに心が揺らぎ、一緒に暮らすために韓国での支援を打ち切り、支援制度のない日本に来る意思を固めついに入国する運びとなった。

来日した美姫さんは、家族と一緒に当支援センターを訪れ、「何も知らない日本に来るのに相当悩んだ。しかし、家族とは、今別れてしまうとまた逢えなくなるようで怖かった。離れ離れだった7年の空白を埋めるために日本にくることを決断した。」と熱く語った。

## 温かい支援に感謝

～匿名募金100万円が届く～

12月13日、当支援センターの金融機関口座に愛知県信用金庫を通じ女性名義で100万円の募金が入金された。信用金庫を通じて本人にお礼をし連絡先を尋ねたところ固く辞退されたという。

当支援センターの運営は、全て皆様からの募金で賄っており、日本入国時の定着金支給をはじめ、日本語の教材の支給なども行ってきた。

脱北者の入国は、増加の一途を辿っており、財源は圧迫されつつある。これを契機として、今後も皆様からの募金が増えることを願うとともに、今回のような温かいご支援に対し心から感謝しています。

## みなさまのご支援をおまちしています!

着実に増加しつつある脱北者に対してよりよいサポートを行うために、募金をはじめとする右記のような皆様からの温かいご支援をお願いしております。

**お振込みは、下記の郵便口座まで**

- 住宅・職場の斡旋
- 生活習慣アドバイザー
- カウンセリング
- 就職先の斡旋